

法話
去りゆく人が残すもの
すべての命が
つながっていくみ教え
西原 祐治師
柏市西方寺住職

歌人 中城 ふみ子

遺産なき母が唯一のものとして残しゆく「死」を子らは受け取れ

東京・杉並区に築地本願寺の墓所「和田堀廟所」があります。古賀政男や樋口一葉などの有名人の墓もあります。

先日、法話に招かれたおり、境内を散策していると、新しい区画の中に故渡辺淳一氏のお墓がありました。『失楽園』などで有名な作家です。私は渡辺淳一氏の小説では『冬の火花』だけ読んだことがあります。

戦後の代表的な女性歌人・中城ふみ子(1922~54)を小説で書いたものです。冒頭の歌は、その中城ふみ子が詠んだものです。北海道の帯広に生まれ、20歳の時に鉄道技師の男性と見合い結婚。3男1女を出産し、離婚。乳がんが片方の乳房を切除(1953年)、翌年に再発し、2月に肺臓への転

移を宣告されました。そして8月

3日に病死、31歳の若さでした。

渡辺淳一は、中城ふみ子が札幌医大病院で亡くなった時、その大学の医学部1年でした。中城ふみ子とは、直接には合っていません

が、「偶然先輩の医師を訪ねて放射線科の詰め所に行った時、暗い病棟と、その中で迫り来る死を待つ

っている人々の群れを見た」と、当時、中城ふみ子が置かれていた現場を語っています。

魚屋を営む両親、乳がんの治療、子育て、子らに残す遺産は、おそらく皆無であったことでしょう。

冒頭の歌は、その遺産のない状況の中で、「命には終わりがありません。その終わりのある命を生きているのです」という事実を、自らの死を持って子らに残しておきま

すという歌です。

お念仏になる

10年前に往生した父に、生前、「浄土に行ったら何がしたいか」と聞いたことがあります。父は僧侶で、食道がんを患い、治療の見込みもない状態でした。

私になぜそのような質問をしたかという、毎月、訪問する老人ホームで、こんなことがあったか

らです。

92歳の老婦人が、いつもお訪ねすると、亡くなられたお父さんの悪口を言うのです。あるとき「Tさんも、この先、そう長い人生ではありません。お浄土へ行ったら、お父さんがいるから、直接、なじ

つたらいいですよ」と言うと、寂しい顔をされました。

そのとき私は、「Tさんは、浄土で父親に会うということが想像

できないのだ」と思いました。見て聴いて知って、と言う自分の常識に納まることしか思えないんだ、

そう思った時、私は、自分の命が終わった後、仏に成って、二千年百年前の仏さまの教えを直接聞く、と楽しんだり、以外と自由に行

った先の事を思うことが出来たのです。

そのような思いがあったので、父に「浄土に行ったら何がしたいか」と聞いたのでした。そのとき

父は、少し沈黙があつて「ん、南無阿弥陀仏の念仏になる」と言いました。

父が、何を考え念仏になると言

ったかは問いませんでした。しかし今、父から有り難い言葉をいただいたと思っています。

南無阿弥陀仏：と称える中に、

この念仏のお心を教えて下さった親鸞聖人に会うこともあります。また、南無阿弥陀仏：と念仏しながら、30代で往生した浄土真宗の伝道に燃えていた友のことを思う

こともあります。いま南無阿弥陀仏：と称えながら、この浄土真宗というみ教えに触れる環境に育んでくれた父のことを思っています。

私たち浄土真宗の者は、お浄土に至ってなき方々と出会うということも有り難いことですが、それ以上に、いまこうして南無阿弥陀

仏：と称える中に、先にゆかれた方々とふれ合っている。これがなんとも有り難いことです。

中城ふみ子は、「遺産なき母が唯一のものとして残しゆく「死」を子らは受け取れ」と詠みましました。私の父は、「父が唯一の者として残しゆく「南無阿弥陀仏」を子らは受け取れ」と残してくれたようです。父とのご縁が念仏で結ばれている。父だけではない、すべての命とつながっていきけるみ教えが浄土真宗という仏道です。

本願寺新報 平成29年2月10日号掲載



共命鳥

住職より

三月十日

昭和20年3月10日の東京大空襲から72年経ちました。築地本願寺の分院の慈光院(墨田区横綱)では追悼法要が開かれました。

この慈光院は、関東大震災で三万八千人余の焼死者を出した、陸軍本所被服廠跡地に、追悼の場として、また残された者の心のより所として本願寺の説教所が設置されたのが始まりです。

江戸の町

火事とけんかは江戸の花 等と言われましたが、江戸にあるお寺も当然火事とは無関係ではいられません。江戸初期に、浄土真宗本願寺派の「別院」として建立された「江戸浅草御堂」が、明暦3(1657)年、「明暦の大火」(振り袖火事とも呼ばれました)で焼失し、幕府の命令で現在の築地(幕府に与えられたのは、八丁堀の海上でしたので、佃島の御門徒が中心となって埋立を行いました。)の地に移ったのが築地本願寺です。

住職の実家のお寺も築地に移りましたが、関東大震災で焼失する

前の本堂の図面を見ると、完全な蔵造りで、火災に備えていたことがわかりました。

三月十一日

平成23年3月11日の東日本大震災から6年が経ちました。仏教では七回忌をお勤めする年です。

あの時、お寺の周辺では大きな被害はなかったものの、帰宅困難・物資の不足・繰り返し返される被害の映像と、しばらく暗い気持ちで過ごしていました。

あの震災は、私たちにたくさん教訓を与えてくれましたし、備えの大切さも身にしみて感じました。

教誓寺は

平成二十四年に完成した教誓寺の本堂は、木造ながら耐震構造を備えています。備えることが大切と考えています。しかしながら、近年は、御門徒様の御法要件数の減少などで、備蓄計画も建てづらくなっています。皆様のご助言ご助力をお願いいたします。

住職は

33年間続けた教員の仕事に終止符を打ち、お寺の仕事に専従する事となりました。いままで、法要・葬儀等ご希望の日程で行えなかったことも多くありましたが、日

程的自由度は高くなりますのでご安心下さい。

芝組公開講座より

先月の25日に、笹川記念会館に於いて「いまさら聞けないお寺とお墓の話」という講演会を、今までお寺とご縁のなかった方々を対象に芝組主催で行いました。

講演者は、行政書士・葬祭カウンセラーの勝桂子さんは、最近話題に上ることが多くなった終活や墓じまい・老後資金などについてお話をいただきました。

その中で、終活事業を展開していたNPO法人などが破綻していた事を挙げ、やはりお寺が一番頼りになるとおっしゃって下さいました。そして、皆さんはお寺に気兼ねしているけれど、お寺は、話をしに来て欲しい・待っている。仏教界全体で見れば、中には話のわからないお坊さんもいるけれど、浄土真宗は話を聞く宗派なので、疑問など、どんどん話して、分かり合うのが大切との事でした。教誓寺でも、葬儀のお布施などをお預かりしている御門徒様もありますし、「先ずは聞く」から始めたいと考えています。いつでも、

何でもご相談いただきましたらと思いい待っています。

維持(会)費

進納のお願い

教誓寺総代・世話人一同

平成二十九年度の教誓寺「維持費」のご進納をお願いいたします。

詳しくは、同封の別紙

教誓寺維持費(護持会費)

納入のお願いをご参照下さい。

彼岸会法要のご案内

3月20日(月)

春分の日

午後2時より

ご都合のつく方は、

時間に合わせて

お参り下さい。

○ご一緒にお経を上げて

お勤めいたしましょう

***お彼岸の期間は**

春分の日(前3日間と

後の三日間の七日間

です。

3月17日(金)〜23日(木)

浄土真宗本願寺派 圓生山 教誓寺

10810073

東京都港区三田 一丁二一十一

〇三(三四五)二二九

kyousei.ji@js4.so-net.ne.jp